様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２０ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０１２１０

研究課題名（和文）在ロシア博物館所蔵のアイヌ・コレクションの形成過程に関する研究

研究課題名（英文）Reseach on the formation process of the Ainu collection in Russian museums

研究代表者
鈴木　建治（SUZUKI, Kenji）

北海道大学・文学研究院・共同研究員

研究者番号：００５８０９２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の当初の目的は、ロシアのアイヌ・コレクションの形成過程を解明すべく、主要な博物館のコレクションに焦点を当て、その収集者（個人あるいは組織）のアイヌ民具をめぐる一連の動き（収集経緯）を検討し、日本国内資料を中心に構築されたアイヌ研究からの脱却を目指すものであった。しかし、研究期間中に、新型コロナウイルスの全世界的な拡大、ロシアのウクライナ侵攻などが生じ、ロシアを核とする研究を推進することが不可能になった。そこで、研究目的の視点を活かし、国内のアイヌ・コレクションを対象として調査を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義や社会的意義は、各時代のコレクターのまなざしを通じて、アイヌ資料の調査研究や展示の在り方について、再考を促すことがあると考えられる。19世紀後半以降、アイヌ民具を中心とするコレクション形成が本格化するにあたり、現在の研究倫理の観点からみて、アイヌ民族に配慮し誠意ある対応をしていなかったものも存在する。アイヌ民族の尊厳を尊重するという理念に則り、コレクションの来歴を十分吟味した上で、慎重に資料を選定し、アイヌ民族の歴史と文化を語る調査研究や展示を目指すことが、これらに携わる者たちに求められる。

研究成果の概要（英文）：The original purpose of this research was to elucidate the formation process of the Ainu collection in Russian Museums. It was planned to examine how Ainu collections in Russia came to be stored in museums. Through this research, I aimed to acquire a new perspective that is not limited to research within Japan.
However, during the research period, the global spread of COVID-19 and Russia's invasion of Ukraine made it impossible to proceed with the research in Russia. Therefore, using the perspective of the original research purpose, I investigated Ainu collections in Japan.

研究分野：北東アジアにおける物質文化研究

キーワード：アイヌ・コレクション

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

2020 年、アイヌ文化の復興・創造の拠点としての民族共生象徴空間(通称：ウポポイ)が北海道白老町に開設され、その中核施設となるのが国立アイヌ民族博物館である。博物館の最重要課題のひとつとして、国内研究だけでなく海外研究の充実が挙げられている（『「民族共生の象徴となる空間」における博物館基本計画』2015:23-25）。

1990 年代後半から 2000 年代前半にかけて、これまで注目されてこなかった海外の民具調査が体系的に実施された（小谷・荻原編 2004）。日本国内では知られていなく、しかも保存状態が良好な資料が数多く発見され、物質文化分野に留まることなくアイヌ研究全体を大きく前進させた。海外コレクションの特徴は、日本国内コレクションにみられるような良品に焦点を当てた骨董的な観点から選択的に収集されたものだけでなく、アイヌの文化・生活を知るための「学術的」な観点から網羅的に収集されたものが多い点が指摘できる。その中でも、特にロシア所蔵資料は、質・量・収集年代幅などが他の海外資料を凌駕し、アイヌ研究にもたらす衝撃は計り知れなかった（SPb-アイヌプロジェクト調査団 1998, 荻原他編 2007）。

以上の先行調査により、海外資料に目を向けることが新たなアイヌ研究につながる、という共通認識が作り上げられた。

２．研究の目的

本研究の当初の目的は、海外のアイヌ・コレクションの形成過程を解明すべく、ロシア連邦サンクト・ペテルブルグ市のロシア科学アカデミー人類学民族学博物館（MAE）、ロシア民族学博物館（REM）の 2 館に所蔵されているアイヌ民具に焦点を当て、その収集者（個人あるいは組織）のアイヌ民具をめぐる一連の動き（収集経緯）を検討することで、日本国内資料を中心に構築されたアイヌ研究からの脱却を目指すものであった。アイヌ民具を収集した瞬間の行動のみを復元するのではなく、収集者を取り巻く行動全体を復元することで、アイヌ・コレクションの形成過程の意義を当時の視点から考察することを目的としていた。

しかし、研究を開始する 2020 年から、新型コロナウィルスが全世界的に広がり、調査を進めることが困難であった。その影響が落ち着きつつあり、研究の開始に目途が立ちそうであったが、2022 年 2 月に起こったロシアのウクライナ侵攻により、事実上、ロシアへの渡航ができなくなった。

そのため、研究の核であったロシアでの現地調査の代わりとして、上記で示した研究目的の視点を活かしつつ、国内のアイヌ・コレクションを対象とした、コレクション形成史の研究へとシフトした。特に、アイヌ資料の中の民具資料について、そのコレクションしてきた歴史的な経緯について整理を行った。

３．研究の方法

本研究の方法は、国内の博物館等に収蔵されているアイヌ・コレクションの資料の実見調査とその収集経緯に関する情報収集を基本とした。アイヌ資料の収集経緯については、まずは各所蔵施設に保管されている台帳・目録等の記載情報により確認し、それ以外は文献史料・新聞等から得た。更にアイヌ資料を実見調査することにより、資料自体に付随する情報（注記やラベルなど）により、文字史料からは得られない収集経緯を確認した。このような方法により、本研究期間では、北海道の浦河町立郷土博物館やむかわ町穂別博物館などのアイヌ・コレクションを対象とし調査を実施した。

また、アイヌ資料のコレクション形成に関する歴史的な経緯について、特にそのはじまりに注目し、関連文献等を収集し分析を行った。初期コレクションの形成過程における、アイヌ資料により投影されたアイヌ像を探った。

４．研究成果

本研究では、国内におけるアイヌ資料のコレクション形成を中心にその歴史的な経緯について検討した。

浦河町立郷土博物館所蔵のアイヌ・コレクションの調査では、戦後のアイヌ・コレクション収集に関する歴史的経緯を明らかにした。当該博物館のアイヌ資料は 1960 年代から 70 年代までを中心に浦河町で集められたものが核となっている。20 世紀初期を軸としてその前後で収集された、いわゆる「伝統的なアイヌ文化」が営まれてきた時代の資料から、現在の「受け継がれてきたアイヌ文化」の中で生み出されている資料に至るまでの、その間を埋める時期に属するアイヌ・コレクションと位置付けられる。戦後からのアイヌ文化の復興の中で、北海道の各地域で起こった博物館の設立と連動しながら、地域に根差した博物館がアイヌ文化とどのようにかかわってきたのか、という北海道の一特殊性を考慮した資料調査を実施していく必要があろう。そのような視点に立ちながら、アイヌ・コレクションの形成との関連性について検討した。浦河町における初期のアイヌ資料収集の動きには、地域のアイヌ民族の協力の下、浦河町郷土史研究会が実施した調査・収集・保存などの活動、そしてその活動の延長上に位置する郷土館（博物館の前

身）の開設と関連していたことがわかった。また、浦河町以外の人物が資料の提供を行い、博物館の展示品の幅を広げていったことも指摘できた。

むかわ町穂別博物館所蔵のアイヌ・コレクションの調査では、浦河町立郷土博物館所蔵資料と同様、戦後の北海道における地域博物館の設立に関した、コレクション収集の歴史的経緯について検討した。そのコレクションの形成過程について、収集時期は２つに分けることができた。１つは旧穂別町教育委員会がおそらく町内で 1961 年頃に収集した資料群であり、もう１つは旧穂別町立博物館の開館前後に当たる 1980 年代に収集された資料群であることが判明した。また博物館収蔵資料は、地元のアイヌ民族における文化の学びと文化復興などに寄与している状況も確認することができた。

国内外でアイヌ資料がコレクションされはじめたその歴史的経緯については、文献史料等の分析から、下記のように総論的にまとめることができた。

アイヌ民族の歴史と文化を知るための資料をコレクション形成のはじまりは、現時点での資料の残存状況から勘案し、おおよそ 18～19 世紀頃と考えられそうである。現在確認できる資料から推測すると、アイヌ民具の初期コレクションは、18 世紀初頭頃のロシアで開始されたとがわかっている。ロシア帝国の版図の拡大と毛皮獲得と背景とし、毛皮税を支払うことを義務化された僻地の臣民である「クリル」（千島アイヌ）が、物質文化により「異民族」として表象されたと考えられる。一方で、日本では、卓越した技術によるアイヌの民具が、エキゾチックな文物として認識され、当時の知識人層を中心に流通していた。ただその量は少なく、幕府や松前藩は民具よりもむしろ文献・絵図史料により「異民族」を表象していたと考えられる。

明治政府による日本の近代化と国際化への 19 世紀後半以降の動きは、北海道の内国化と共に、アイヌ民具が北海道の「開拓」の成果品の一部として扱われていった。この時期から、アイヌ民具のコレクション形成が本格化していく。それ以前の文献・絵図史料を中心としてアイヌ民族を表象していた時代から、民具資料など物質文化を中心としてアイヌ民族を表象していく時代へと変わっていったといえる。北海道の「開拓」を推進した開拓使による、アイヌの衣食住・儀礼などの用具一式で構成された網羅的・体系的なコレクション（アセンブリッジ化）は、同化政策がとられる以前のアイヌ民族の姿を表象させ、それを伝統的なアイヌ文化として視覚的させ、現在に通じる「伝統」のイメージの骨格をつくったと想定された。

現在、アイヌ資料は、アイヌ文化の中で受け継がれてきた創造性を、時代や社会の状況に合わせて、新しく生み出され、コレクション形成の領域は更に拡張している。それは、アイヌ民族を取り巻いている複雑化した現代の時代や社会に敏感に反応し、今のアイヌ民族の歴史と文化を語る資料として形づくられているであろう。拡張してく数あるアイヌ資料の中から、ある意図・目的のもとで集められたコレクションは、今のアイヌ民族の姿を視覚化させたものと理解できる。またそれは、アイヌ資料をコレクションする組織や人物などの「コレクションする側」がアイヌ民族の歴史と文化をどのようにみているのかにも直結するであろう。

本研究を通じて、アイヌ資料のコレクション形成における今後の重要な課題のひとつとして、下記の点を挙げることができた。

近現代に入り、国の公的機関や学術機関、そして民間の在野の研究者やコレクターなどが大規模に収集していく中、アイヌ資料、特にアイヌ民具をコレクションするという行為とは、その初期の段階においては、アイヌの生活の中から切り離し別のコンテキストへ移行することを意味していた。その多くの資料は、製作者・使用者の個性を排除した、いわゆる「名もなきアイヌ資料」としてコレクションされ、その民具のアセンブリッジは「伝統的なアイヌ文化」として表象されていた。その時、「コレクションされる」側のアイヌ民族の声や思いも、同時に切り離されてきてしまったのである。

19 世紀後半以降、アイヌ民族が博物学的な関心の対象となり、民族学、人類学、考古学などへと細分化する学術分野の各コレクターによって、アイヌ資料が多岐にわたりコレクションされるようになってきた。この時期に収集されたアイヌ資料は、歴史的・文化的な価値が高いものとして評価されている。しかしその一方で、コレクションの収集において、現在の研究倫理の観点からみて、アイヌ民族に配慮し誠意ある対応をしていなかったものも存在する。このような当時の状況に対し、現在、アイヌ・コレクションに触れる機会を有する者たちは、決して肯定・追認することはないであろう。アイヌ民族の尊厳を尊重するという理念に則り、コレクションの来歴を十分吟味した上で、慎重に資料を選定し、アイヌ民族の歴史と文化を語る調査研究や展示を目指すことが、これらに携わる者たちに求められる。

今後のアイヌ・コレクションの形成史の研究において、「コレクションする」ことで切り離されてしまった、「コレクションされる」アイヌ民族の声や思いを、様々な資料を使って復元していくことが最重要課題のひとつである、と考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 鈴木建治	４．巻 -
２．論文標題 浦河町立郷土博物館所蔵のアイヌ資料コレクションの形成について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国立アイヌ民族博物館におけるアイヌ資料調査報告書‐浦河町立郷土博物館所蔵資料目録‐	６．最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木建治	４．巻 60
２．論文標題 アイヌ文化期	５．発行年 2024年
３．雑誌名 北海道考古学	６．最初と最後の頁 87-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 鈴木建治
２．発表標題 アイヌ資料とはなにか
３．学会等名 国立アイヌ民族博物館第5回特別展示シンポジウム「アイヌ資料をコレクションすることを考える」
４．発表年 2022年

〔図書〕　計3件

１．著者名 谷本晃久、鈴木建治、ワシーリー・シェプキン	４．発行年 2022年
２．出版社 北海道大学アイヌ・先住民研究センター	５．総ページ数 147
３．書名 ロシア国立古文書史料館所蔵 ロシア人による18世紀後半クリル航海記録 ―1778・1779年のクリル人ならびにエゾジのダイクゥンとの接触―	

１．著者名 鈴木建治	４．発行年 2022年
２．出版社 平凡社	５．総ページ数 288
３．書名 池谷和信編『アイヌのビーズ　美と祈りの二万年』（「第2章　多様な素材と縄文・続縄文－北海道におけるガラスビーズ出現前夜の特徴とは何か」（55-68頁）を分担執筆）	

１．著者名 鈴木建治	４．発行年 2022年
２．出版社 国立アイヌ民族博物館	５．総ページ数 28
３．書名 国立アイヌ民族博物館編『国立アイヌ民族博物館におけるアイヌ資料調査報告2』（「むかわ町穂別博物館所蔵のアイヌ資料コレクションの形成について」（3-5頁）を分担執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関